

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32417

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00021

研究課題名(和文)現代諸学まつわる問題解決のためにクザーヌスの「無学者の思想」を活用する試み

研究課題名(英文)Trying Application of the 'Layman' Thought of Nicholas of Cusa to solve problems of contemporary science

研究代表者

八巻 和彦 (Yamaki, Kazuhiko)

西武文理大学・未登録・学長

研究者番号：10108003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題が注目した現代諸学の問題性は、計画を申請した2017年以降、さらに顕著になっている。私は、クザーヌスの「無学者の思想」を活用する試みを、自身をクザーヌス的な無学者と位置付けてインタディシプリナリな視座をもって活動することで実施した。とくに日本学術会議問題の検討から明らかになったことは、日本では民衆レベルにおいても明治以来の近代諸学のディシプリンが墨守的に受容されていて、オルタナティブな学問を創設する意欲が社会に乏しいと同時に、「失われた30年」への反省から産業界等からは今さらのように「総合知」の必要性が叫ばれる、という矛盾状態が明らかになった。今後も自身で研究を深める所存である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代日本における諸学は、明治以来、政府が中心になって欧米から移入したものであることによって、諸学のディシプリンが強固であり、新たな学問の内発的に生まれにくいこと、ならびに、そのディシプリンについての意識は、一般民衆のレベルまで共有されていて、諸学の直面している限界を打ち破るだけのダイナミズムが民衆の間にも生まれにくいことを明らかにした。このような学問状況のなかでも、「雰囲気学」という新たな学問分野を確立に奮闘している神戸大学雰囲気学研究所の久山祐甫氏と共催で国際的な研究会を開催したり、シューベルトの歌曲の日本における受容にまつわる問題性を研究する梅津時比古氏の科研費による研究とも共同した。

研究成果の概要(英文)：The problematic phase of the contemporary sciences in Japan that this research project focused on has become even more remarkable since 2017, when I applied for the plan.

I have conducted an attempt to utilize Cusanus' "idea of the Layman" by positioning myself as a "Layman" and daring to work with an interdisciplinary perspective. In particular, my examination of the Science Council of Japan (SCJ) issue revealed that, even at the popular level in Japan, the modern academic disciplines that have existed since the Meiji era have been accepted in an adherent manner, and that there is little motivation in society to create alternative academic disciplines, while at the same time, reflecting on the "lost 30 years," the industrial world, etc., have been calling for "comprehensive knowledge" as if it were a new necessity. This is contemporary contradictory situation of Japanese sciences. I intend to continue to deepen my own research.

研究分野：哲学

キーワード：インタディシプリナリ ディシプリン 総合知 専門家と素人 日本学術会議問題 科学技術 人新生 自然哲学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現代の学問や技術について、一方において、以前には存在しなかった成果をもたらして人類に便利さや安楽さを提供していると同時に、他方においては取り返しのつかないような害悪をもたらしている、という矛盾した問題性が存在する。その典型は、2011年3月の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所における深刻な事故とそれの今も続いている悪影響である。

それらの学問や技術に携わっている人々(「科学者」や「研究者」、「技術者」と称され、かつ他の人々には「専門家」と自称する)は、自らが携わっている対象についての深い反省的視点をもつことがほとんどなく、自己の携わる専門領域における他の専門家との競争で優位を占めることに専念しながら、外部に向かってはそれらの利点だけを声高く喧伝することで、自らが携わる科学や技術を駆動するための多額な経費(多くの場合が国民の税金に基づく公費)を確保することに注力している。これは、日本だけに限られることなく、ほとんどの「先進国」と言われる国家における卓越的な風潮である。そこで、ドイツの研究者仲間とも密接な連携のもとで、研究を遂行することを目指していた。

2. 研究の目的

上述のような現状を是正して、真に人間の為になる学問や技術を成立させるための方策を考えるために、ニコラウス・クザーヌス(1401-1464)が生み出した「無学者の思想」を活用しようとするのが、本研究課題の目的である。

この「無学者の思想」について少し具体的に記す。原語のラテン語では *idiotia* であるこの語を「無学者」とここでは表記するが、この語は本来、(学者に対する)無学者、(専門家に対する)素人、(聖職者に対する)一般信徒という、日本語では三種の若干ニュアンスを異にする意味を持っている。その *idiotia* としての「無学で貧しいが真理を希求する真摯さに満ちている」一介の木サジ彫りの職人が、当代一流の哲学者(当時は現代の科学者も含意していた)を相手に対話を続けることで、逆に哲学者がこの「無学者」から教えられることになるというのが、クザーヌスの著作における本来の描写である(この点については、下の「4. 研究成果」の中の「主な発表論文等」でも詳述している)。

このような「無学者」(素人、一般信徒)の視線・視点を、現代の状況、すなわちディシプリンによって細分化されていて、学問・技術に携わる人々が本来の学問・技術の目的を見失っているという状況に当てはめることで、一方において現状を批判すると共に、他方において新たな学問・ディシプリンを生み出すための手掛かりを得る、ということを目指した。

3. 研究の方法

先ずは、この問題性に関する文献による研究を進めた。

併せて、自らをクザーヌスの「無学者」と似た状態において、自身のこれまでの学問研究について反省する機会を得ながら他の学問分野のことを知ると同時に、それらを自らのディシプリンに基づいて捉えた場合にいかなることが見えてくるかを試みた。すなわち、インターディシプリナリナリな場で他の学者と積極的に交流するべく務めた。

以下にこの視点からの対外的活動について、本研究計画の最初の年から順番に略記する。

2018年5月1日には、ドイツの Cusanus Hochschule の Summer School において Naturphilosophie in Japan という講演を行い、聴講学生と議論をした。

2019年1月末には三日間にわたる Workshop: Die Aktualität der Figur des Laien をドイツの Cusanus Hochschule において他の同僚と共に実施し、聴講学生と議論をした。

2019年6月には、沖縄外国文学会の招待を受けて「過去の豊饒性 - 人間は「時間的存在」である」という講演を行い、議論をした。

同じく2019年6月には、哲学という自身の本来のディシプリンの中ではあっても研究対象の時代が異なるヘルダー学会(18世紀にドイツで活躍した哲学者であるヘルダーについて研究する学会)において招待講演を行い、議論をした。

2019年9月には、アメリカ・クザーヌス学会大会においてニコラウス・クザーヌスの *coincidentia oppositorum* の思想と西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」の思想の関係を考察した発表を行い、質疑も行った。

2019年12月には、ドイツの Biberach 大学におけるワークショップで *Der Mensch im Anthropozän* という講演を行い、議論をした。

2020年には、日本学術会議の委員の政府による任命拒否問題について考察して、それを本研究課題の中に位置づけながら、中世哲学学会大会において発表して、議論をした。

2023年には、神戸大学霧岡気学研究所と共催で小さな国際的研究会を実施して、自らも研究発表をして、議論をした。

同じく2023年には、インターディシプリナリな活動として、シューベルトの歌曲の日本における受容に関わる問題性の研究にも参画して、質疑を行った。

4. 研究成果

本研究課題が注目した現代諸学の問題性は、計画を申請した2017年以降、さらに顕著になりつつある。以下、本研究を実施しつつ明らかになったことを略記する。

- (1) 諸学が自然科学化(Vernaturwissenschaftlichung)されるという傾向が強まっていることを指摘しつつ、その問題性を明らかにした。即ち、自然科学において重視される「合理性」を他の学問にも求める傾向が強まり、その結果、人間並びに自然一般についての人間の理解が自然科学化されることとなり、ひいては人間並びに自然一般についての理解が一面的になっていることを、ほぼ100年前のフッサールの警告にも言及しながら、明らかにした(これは、主として下の「a」の講演で指摘)。
- (2) クザヌスの「無学者の思想」は、ギリシア的無知の思想とヘブライ・キリスト教的無知の思想の両方を交差させる形で形成されており、同時に、知的探求の制度化と権威化を警告するものであると明らかにした(これは、主として下の「a」の講演で指摘)。
- (3) 明治維新以降の日本における学問の制度化と権威化の様相が特殊日本的であること、そしてそれが第二次世界大戦敗戦後にも本質において継続的に存在していること、それゆえに新たな学問分野(ディシプリン)の創出が困難になっていることを、西欧の学術研究の状況との比較において明らかにした(これは、主として下の「b」の講演で指摘)。
- (4) 上述の「idiotia」の含意を踏まえれば「専門家と素人」という区分も成立する。そして、この区分内部において「専門家」と「素人」とは相互的に「対照・対立」が生じやすい。しかし冷静かつ詳細に検討すれば、この区分は一分野の内部において成立・存在するものであるから、当該分野の「専門家」である一人の人間は、ある分野においては「専門家」であっても他の分野では「素人」となるという構造が存在している。この事実をそのままに認識するならば、「専門家」と称される人の一般社会における社会的専横という事態は生じないはずであるが、どの分野の「専門家」であるかによって、社会的専横が成立しやすい構造と歴史的背景がある。例えば、周知のように自然科学ならびにそれと密接な関係において成立している技術・テクノロジーは、普遍妥当性を有しているので、これに携わる「専門家」である科学者と技術者は、この社会的専横性を容易に発揮できる立場にいる(これは、主として下の「c」の講演で指摘)。
- (5) とりわけ日本では、自然科学およびそれと密接に関係しつつ成立している技術が日本では「科学技術」という四字熟語がとるほどに一体化して理解されているので、この分野の「専門家」は、上で触れたように、明治以降、政府の後ろ盾を得ることで、あたかも前近代の宗教における「聖職者」であるかのように社会的専横を謳歌しやすい伝統がある。これが2011年3月の東日本大震災に伴う「フクシマ・カタストロフィ」を生み出した一因と言えよう(これは、主として下の「c」および「d」の講演で指摘)。
- (6) 同時に、大自然の現状を地球規模でとらえるならば、人間が地球上に「君臨して」プラスチック等の人工物で大自然を汚し、様々な問題を生み出しているという時代が、つまり「人新世」Anthropoceneがすでに成立しているという認識が、過去15年ほど前から、「先進国」の環境問題に意識的な人々の間では共有されている。この「人新世」という現状を成立させている主たる原因はわれわれ人類の振る舞いに他ならないが、そのような振る舞いを可能としているのは、日本的に表現すれば「科学技術」に他ならないのであるから、この分野の「専門家」の責任は大きいと言わざるを得ない。そこで、「人新世」という現状から脱却するための一つの提案として、自然哲学の必要性を指摘した。自然科学的視点から見れば時代遅れに見えるであろうが、この自然哲学とは、人間がありのままの姿でありのままの自然と交流することで、人間のうちに結晶してくる思想・態度を認識し、それを文字化し、他の人に伝え共有することを目指すものである(これは、主として下の「c」および「d」の講演で指摘)。
- (7) しかしながら、現代の「科学技術教」の「聖職者」とも言える科学技術者という「専門家」たちの行動形態は、自己の責任を自覚しているようにはみなしにくい。例えば、今や世界中で問題意識が共有されているCO₂削減という課題がある。それは、近代諸科学とそれに基づいて開発応用された諸技術が産出した負の遺産の解決であるが、この解決方法について、空気中のCO₂を科学技術によって吸収して地中に貯めることで「解決」を図るという提案がなされていて、それに公費が投入されている。しかし、この解決法は、そもそもこの課題を生み出したディシプリン(専門分野)の内部でのものであるから、その試み自体が新たな別の問題を生み出す可能性がある。しかしながら、この自己矛盾的な事態を指摘する言説は、ほとんどない。とりわけ日本においては、「科学技術」が導入されるに際しては、上記のように政府が中心になって「先進国」たる欧米から移入したものであって、それを駆動するためには初めから公費が投入されることが当然であり、むしろ「公費を付けるからこの学問を研究・教育すべし」と誘導される構造となっている。その結果、これらに携わる「専門家」は、自らが生み出した問題を解決するために、再び公費を使用するのが当然であると考えられるようになる。
- (8) 上述のような、予算と関わる強固な枠組み(ディシプリン)が作用している結果、そのディシプリンの内部にいる「専門家」は、自身の立場を根本的に反省することはほとんどなく、むしろ、いかなる事態が生じようとも自身のディシプリンの正当性と有用性

を、社会ならびに政府に向かって喧伝することとなる。それゆえに反省的な視座をもつ専門家は、そのディシプリンから排除されるか、自ら身を引くこととなりやすい。その結果、日本の「科学技術」の世界には、その内部においてインターディシプリナリな視座が機能することが少ない。それが、根本的な意味での新たな諸学が創出されることがほとんど成立しないということに結果しているのである。

- (9) 上の(8)で指摘した現状を打破するために 無学者・素人・一般信徒の思想 という視点を導入して検討したが、日本で新たな学問が創出されることが困難である構造が存在することが明らかになった。上の(3)で言及したことと関わるが、学校教育において「科学技術」という、上記の四文字熟語の精神に基づく教育が上意下達的になされ続けてきているゆえに、一般国民は、いわば「科学技術教」の一般信徒＝無学者であるかのような自己認識をもちやすく、「科学技術のことは自分たちにはよく分からないが、善いものであるに違いない」というほとんど「信仰」に近いものをもっている。その結果、「規律」という意味でのディシプリン意識が一般人の間に作用することになり、「科学技術」の社会的機能についての反省的あるいは批判的な見解を一般人もつことは困難となる。そして「素人は口を出すものではない」という「自制」が前面に出ることになっている。それゆえに現実には、上述のような「科学技術」の直面している限界を限界として認識した上で、それを打ち破るというダイナミズムが一般民衆の間に生まれにくいのである。行政的には「パブリックコメント」というシステムが設定されてはいるが、それが一つの具体的な「科学技術政策」の反省に向けて機能することはほとんどなく、政策着手への最終段階において「儀式」として設定されているだけであって、それは形骸化している。そればかりか、形骸化していても、それに対する異議申し立てが一般国民からなされることはない。ここに指摘した一般国民の学術についての意識は、上述した日本学術会議問題の検討からも明らかになった。2020年に菅内閣が日本学術会議成立以来の伝統に反して学術会議内部で選ばれた委員の任命を拒否したというこの問題に対して、国民の間では、「専門家は政府の言うことに従っていけばいいのであって、政府の政策に反対するのであれば、国費が支出されている学術会議の外で活動すればいいのだ」という意見が卓越的であった。ここには、近代的な諸学を成立させることとなった西欧における学術についての理解とは顕著な異なりが存在している。西欧では、当代の権威に抗して、時にはそれを正面から批判することで、新たな学術の地平が用意されることになってきたのである。以上のような日本における一般国民の学術に対する意識は、日本で新たな学問が創出されることの困難さを示しているであろう(以上の点は、主として下の論文で指摘)。
- (10) 他方において、「失われた30年」という日本の現状への反省から、産業界を中心に今さらのように「総合知」の必要性が叫ばれ始めた。その発端は、日本の既存の学術、とりわけ自然科学的、技術的な諸学の行き詰まりが、この「失われた30年」の一因であるという認識である。この「総合知」という表現で意味されていることは、従来の日本における学術研究が自然科学的な分野に偏っているから、その偏向を正して、人文・社会科学的な学問をも重視すると同時に、これら三分野を「総合的に」身に着けた人材を育成し、それによって新たな学問を創出したいということであろう。
- (11) 上で私は「今さらのように」と記したが、それには個人的な理由がある。今を去ることちょうど30年前に、私は『『教養』がやせ細る』という小論を毎日新聞紙上(1994年3月29日夕刊)に掲載してもらって、その数年前に当時の文部省によって実施された「大学設置基準の大綱化」によるネガティブな影響を指摘した。「改革だ。もっと専門を！」という当時の風潮に対して警鐘を鳴らし、大学における一般教育の必要性と、とりわけ哲学的視点の重要性を力説した。それから一世代が経過して、今や、日本における学問の状況は、「総合知」を身に着けた有能な専門家が輩出しようというものではなくなっている。とりわけ人文科学的諸学においては学会の会員が減少すると同時に、それへの有能な参画者も減少している。ここにも「失われた30年」が生じているのである。その主たる原因は、「大学設置基準の大綱化」によって日本中の大学の人文系教員の定員が大幅に削減された結果、この学問分野の研究者として生きていける可能性が縮小されたことである。その結果、深くかつ柔軟な「総合知」を学生に身に付けさせる教育研究体制を実現することが、日本の多くの大学において困難になっているのである。実に深刻な状況ではある。
- (12) 以上のような、伝統的ディシプリンの拘束が強い日本の学問状況のなかでも、例外的に「雰囲気学」Atmospheric Studies という新たな学問分野の確立に奮闘している神戸大学准教授の久山祐甫氏と共催で国際的な研究会を、2023年9月に開催し、自身も研究発表をした(下の論文がそれである)。
- (13) 同じく2023年9月に、科研費による研究代表者としてシューベルトの歌曲の日本における受容にまつわる問題性を独自の視点から研究している梅津時比古氏(前桐朋学園大学学長・現同大学客員教授)に協力して、私自身の学際的研究の一環として彼の研究に参画した(下の論文がその一端である)。

主な発表論文等

(1) 雑誌論文

八巻和彦、シンポジウム「異文化における音楽(ドイツ歌曲)の受容 《冬の旅》を中心に」における質問の提示、研究代表者・梅津時比古による研究報告書、2024年、pp. 57-63; 121-129.

八巻和彦、文化の多元性 について考える 宗教寛容論との連関において、ヘルダー研究、特別寄稿・査読無、第25号、2023年、pp. 267-298.

八巻和彦 (Kazuhiko Yamaki): Eine alte, aber andere Naturwahrnehmungsrichtung im späten Mittelalter – bei Nikolaus von Kues – und ihre Bedeutung für eine gegenwärtige Naturphilosophie, in: Zeyer, Stahl, Schwaetzer (Hrsg.): Natur in der Lyrik und Philosophie des Anthropozäns: Zwischen Diagnose, Widerstand und Therapie, 2022, 招待講演・査読無、pp. 99-106.

八巻和彦、クザーヌスの イディオータ 思想の現代的意義 専門家 素人 関連の視点から、中世思想研究、査読有、第63号、2021年、pp. 83 - 96 .

八巻和彦、「過去 の豊饒性 - - 人間は「時間的存在」である」、Southern Review, 招待講演・査読無、No. 34、2019年、pp. 3-14.

(2) 学会発表・講演

八巻和彦 (Kazuhiko Yamaki): Das cusanische Denken in „De visione Dei“: Ein Beitrag zur Entwicklung des Konzepts von Atmosphäre; in: KOIAS-symposium on the history of atmosphere in the European thought, 2023年9月23日、神戸大学(兵庫県)。なお、この発表は2024年中にドイツにて公刊される予定である。

八巻和彦、クザーヌスの イディオータ 思想の現代的意義 専門家 素人 関連の視点から、2020年11月7日、中世哲学会大会: Zoom Webinar(慶應義塾大学・東京)。

八巻和彦 (Kazuhiko Yamaki)、Der Mensch im Anthropozän, 2019年12月17日、Workshop: Perspektiven auf das Aropozän, 2019年12月17日、Hochschule Biberach, Biberach (ドイツ)。

八巻和彦 (Kazuhiko Yamaki)、On the relation between Nishida's ‚Absolutely Contradictory Self-Identity‘ and Cusanus' coincidentia oppositorum, 2019年9月21日、アメリカ・クザーヌス学会大会: Cusanus Today, University of Notre Dame (アメリカ)。なお、この発表は2024年7月にアメリカにて公刊される予定である。

八巻和彦、「過去 の豊饒性 - - 人間は「時間的存在」である」、2019年6月15日、沖縄外国文学学会大会、沖縄国際大学(沖縄県)。

八巻和彦、文化の多元性 について考える 宗教寛容論との連関において、2019年6月23日、ヘルダー学会大会、立教大学(東京都)。

八巻和彦 (Kazuhiko Yamaki)、Eine alte, aber andere Naturwahrnehmungsrichtung im späten Mittelalter – bei Nikolaus von Kues – und ihre Bedeutung für eine gegenwärtige Naturphilosophie, 2019年3月28日、Rokokosaal des Kurfürstlichen Palais, Trier (ドイツ)。

八巻和彦 (Kazuhiko Yamaki)、a) Von Laien und Dilettanten; b) Die Bedeutung des Laientums in der gegenwärtigen japanischen Gesellschaft; c) Die Bedeutung des Laien in der Gegenwart, in Workshop: Die Aktualität der Figur des Laien, 2019年1月29日 - 31日、Cusanus Hochschule, Bernkastel-Kues (ドイツ)。

八巻和彦 (Kazuhiko Yamaki)、Naturphilosophie in Japan, 2018年5月1日、Summer School an Cusanus Hochschule, Bernkastel-Kues (ドイツ)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 八巻和彦	4. 巻 25
2. 論文標題 文化の多元性 について考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヘルダー研究	6. 最初と最後の頁 267, 298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八巻和彦	4. 巻 63
2. 論文標題 クザーヌスの イデオタ思想 の現代的意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中世思想研究	6. 最初と最後の頁 83, 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAZUHIKO YAMAKI	4. 巻 3
2. 論文標題 Die Begegnung zwischen 'Artes Liberales ' und 'Artes Mechanicae ' bei Nikolaus von Kues	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Internationale Zeitschrift fuer Kulturkomparatistik	6. 最初と最後の頁 85 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 八巻和彦	4. 巻 34
2. 論文標題 過去 の豊饒性 人間は「時間的存在」である	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Southern Review	6. 最初と最後の頁 3, 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 10件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 八巻和彦
2. 発表標題 Das cusanische Denken in "De visione Dei" : Ein Beitrag zur Entwicklung des Konzepts von Atmosphaere
3. 学会等名 K01AS-symposium on the history of atmosphere in the European thought (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 八巻和彦
2. 発表標題 ニコラウス・クザーヌスにおける倫理的政治学 De Concordantia Catholica を中心にして
3. 学会等名 第1回 倫理学的政治学 ワークショップ (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 八巻和彦
2. 発表標題 クザーヌスの イディオータ 思想の現代的意義 専門家 - 素人 相関の視点から
3. 学会等名 中世哲学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuhiko YAMAKI (八巻和彦)
2. 発表標題 Nicholas of Cusa's Contribution to the final Phase of Kitaro NISHIDA's Philosophy
3. 学会等名 Cusanus Today: Prospects for Philosophy, Theology, and Mysticism (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko YAMAKI (八巻和彦)
2. 発表標題 Der Mensch im Anthropozän
3. 学会等名 Perspektiven auf das Anthropozän (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八巻和彦
2. 発表標題 過去の豊饒性 人間は「時間的存在」である
3. 学会等名 沖縄外国文学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Yamaki (八巻和彦)
2. 発表標題 Naturphilosophie in Japan
3. 学会等名 Workshop:Natur nach dem Ende der Natur? (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazuhiko Yamaki (八巻和彦)
2. 発表標題 Beziehung zwischen der Schrift Apologia doctae ignorantiae und der Idiota-Schriften
3. 学会等名 Workshop: Die Aktualitaet der Figur des Laien (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Yamaki (八巻和彦)
2. 発表標題 Die Bedeutung des Lientums in der gegenwaertigen japanischen Gesellschaft
3. 学会等名 Workshop: Die Aktualitaet der Figur des Laien (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Yamaki (八巻和彦)
2. 発表標題 Die Bedeutung des Laien in der Gegenwart
3. 学会等名 Workshop: Die Aktualitaet der Figur des Laien (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Yamaki (八巻和彦)
2. 発表標題 Eine alte, aber andere Naturwahrnehmungsrichtung im spaeten Mittelalter und ihre Bedeutung fuer eine gegenwaertige Naturphilosophie '
3. 学会等名 Natur in der Lyrik und Philosophie des Anthoropozaens (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Cuozzo, Yamaki et al.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Mimesis	5. 総ページ数 292
3. 書名 Verbum et Imago coincidunt--Il Linguaggio come specchio vivo in Cusano	

1. 著者名 Borsche, Schwaetzer, Yamaki et al.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Aschendorff	5. 総ページ数 215
3. 書名 Bilder beweglich denken --Akten des Symposions zu Ehren von Kazuhiko Yamaki	

1. 著者名 八巻和彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 744
3. 書名 クザーヌスの思索のプリズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Workshop: Die Aktualitaet der Figur des Laien	開催年 2019年 ~ 2019年
国際研究集会 KOIAS-symposium on the history of atmosphere in the European thought	開催年 2023年 ~ 2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------